

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 4日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520429

研究課題名（和文）

オハイアット・ヌートカ語のドキュメンテーション研究およびコーパス構築

研究課題名（英文）

Documentation and Corpus Construction of Huu-ay-aht, a Nuu-chah-nulth Language

研究代表者

中山 久美子 (Nakayama Kumiko)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：40401426

研究成果の概要（和文）：本研究では、消滅の危機に瀕し研究も未開発であるオハイアット・ヌートカ語（カナダ、ブリティッシュコロンビア州）において、のべ3か月の現地調査を通じて、文法パターンのみならずコミュニケーションスタイルや言語コミュニケーションを取り巻く文化・社会的背景をも含め総合的に記録する「ドキュメンテーション研究」を行い、学術的および人類の知的資産の保持に貢献する言語データベース・コーパスの構築を行った。

研究成果の概要（英文）：In this study, fieldwork has been conducted on Huu-ay-aht, an endangered and understudied Nuu-chah-nulth language, in the province of British Columbia, Canada, over a total period of three months, on the purpose of documenting, not only isolated grammatical patterns, but also communicative patterns together with surrounding cultural and social contexts. Based on the documentation, a lexical and textual database/corpus has been constructed for the academic usage as well as for the preservation of one of the great intellectual properties of human kind in endangerment.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：危機・少数言語

## 1. 研究開始当初の背景

(1) オハイアット・ヌートカ語は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州南西部バンクーバー島、西岸地域で話されている少数言語で、話者数は数十人ほどの高齢者に限られるという、典型的な「危機言語」である。

(2) 研究代表者と研究分担者は、本研究前に15年以上にわたってヌートカ語のアハウザット方言、ツイッシュャート方言を中心とした調査および研究を進めてきた。これらの研究成果をもとに、オハイアット方言の調査・研

究を効率的に進めることができる基盤が整っていた。

(3) ヌートカ語は、複統合性や品詞分類の不明瞭さなど、ヨーロッパやアジアの言語とは非常に異なる興味深い構造的特徴を持ち、その研究は単に個別言語の記述を越えた人類の知的遺産研究という一般的な意義を持つ。本研究でオハイアット方言の調査・研究を進めることは、ヌートカ語諸方言の包括的記録・研究を進めるうえで重要なステップであると考えられる。

(4) 研究分担者は 1970 年代に録音されたオハイアット・ヌートカ語の音声資料を保有しており、この資料には、現在の話者からはもはや得にくい言語・文化の知識も多く記録されている。このデータを現在の調査と組み合わせることで、オハイアット・ヌートカの言語と文化の記録をより豊かなものとするとともに、言語・社会の変化をとらえる貴重な資料を作成することができる。

(5) 本研究の数年前から、オハイアットのコミュニティーでは伝統言語の再活性化への関心が非常に高まり、伝統言語の記録・伝承のための活動が盛んになっている。北米先住民諸語の調査・研究は社会的・政治的困難を伴うのが常であるため、このようにコミュニティー側から言語の記録・再活性化活動への協力・貢献への期待が寄せられる状況はまれにみる好機である。

(6) 研究代表者と研究分担者は、人間言語に観察される文法現象・パターンに関して、そうした規則性が形成され、維持され、また変化していくメカニズムを解明することを研究の大きな柱としている。近年、形式主義的言語学とは異なる機能主義的言語学を中心とする研究潮流の中で明らかにされてきているように、文法パターンの形成・変化を方向付けているのは、実際の言語運用の在り方とそれを形作る認知的・社会的要因や語用論的要因などであると考えられる。したがって、文法パターンがどのように形成され、変化していくのかという人間言語の構造に関してより本質的な疑問に答えるためには、様々な言語について、自然な談話での言語の使われ方の実際を詳しく調査することが不可欠である。

## 2. 研究の目的

(1) オハイアット・ヌートカ語の録音資料の資源化：

1970 年代に収録されたオハイアット・ヌートカ語の録音資料（磁器テープ）をよりよい

保存状態にするため、デジタル化する。さらに、話者の協力を得て、録音内容の書き起こし・記録・分析を行う。

(2) オハイアット・ヌートカ語の語彙・テキスト資料の収集：

現地調査を通じて、文法記述・研究に必要な語彙資料およびテキスト資料を収集する。

(3) 語彙・テキストデータのデータベース化：

(1) で書き起こした過去の語彙・テキストデータと(2)で収集した新たなデータを統合した形で活用できる言語データベースを構築する。さらに、電子コーパスとして、実際の言語運用を基盤とした文法研究や現地コミュニティーでの使用も視野にいたった形での整備を行う。

(4) オハイアット・ヌートカ語によるコミュニケーションのドキュメンテーション：

現地調査を通して、語彙やテキストの収集にとどまらず、オハイアット・ヌートカ語によるコミュニケーションの営みを文化・社会的な背景をも含めより広く記録（ドキュメンテーション）する。オハイアット・ヌートカ語による言語活動をビデオ記録することで、文法パターンにのみ注意を払う狭い意味での文法記述研究を越えて、コミュニケーションスタイルを総合的に記録する「ドキュメンテーション研究」を目指す。

(5) 現地コミュニティーへの技術的・言語学的支援：

オハイアット・ヌートカ語コミュニティーでの伝統言語記録・再活性化活動に対する技術的支援（データの保存・記録・活用法、フォントの開発、コンピュータによる文字処理環境の構築支援など）および言語学的支援（言語教育のためのデータ・ノウハウ提供、文法教育のためのアドバイスなど）を行う。

## 3. 研究の方法

(1) 過去の音声資料のデジタル化と整理：

1970 年代に録音された音声資料を磁気テープ媒体（オープンリールテープ）からデジタル化してコンピュータに取り込み、書き起こしのための聞き取り調査を効率的に進められる形にデータを加工する。

(2) 現地調査：

研究期間の毎年度夏季に約 1 カ月の現地調査を行う。調査は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、バンクーバー島のポート・アルバーニ及びバンフィールドにて行う。現地調査においては、複数の母語話者と面談を行

い、録音・デジタル化された音声資料を聞いてもらい、その書き起こしおよび翻訳に協力を得る。同時に、新たな語彙の収集・録音、テキストデータ（物語や会話などの自然発話）の収集・録音、コミュニケーションスタイルのドキュメンテーションのための映像記録、さらに、文化・社会的背景を調査・記録するためのインタビューを行う。

(3) データの保存：

現地調査で収集される音声・映像データは、コンピュータに取り込み、データ保存のために、順次光学メディア（CD、DVD）に焼きこみ、保管する。

(4) コーパス、データベースの構築：

文字化されたデータには、随時文法分析を加え、電子的に蓄積し、コーパスの構築をはじめ。また、語彙調査およびテキスト資料に出現する語彙をもとに語彙データベースを構築する。さらに、データベースの内容に関して柔軟で多様な検索ができるソフトウェア環境を整えていく。

#### 4. 研究成果

(1) 研究初年度の27日間(8月3日～29日)、第2年度目の28日間(7月31日～8月27日)、および第3年度目の32日間(7月29日～8月30日)にわたり、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州ポート・アルバーニを中心として、現地調査を行った。

① 現地では、母語話者との面談・インタビューを行った。面談では、すでに録音されているオハイアット・ヌートカ語の音声データの聞き取り、書き起こし、翻訳への協力を得た。同時に、関連する語彙や言語表現などの新たなデータ収集も行った。また、ヌートカ語共同体における文化的・社会的背景に関する聞き取り調査も行った。英語やヌートカ語によるインタビューはのべ40時間ほどにわたり、すべてICレコーダー、また状況が許す限りビデオによって記録した。これらについても、話者の協力のもと、情報の整理、書き起こしをすすめている。収録された内容としては、民族伝承、物語、昔の生活、民族による自然観・世界観、しきたり、話者の出自、日常的な話題など、言語活動を広くドキュメントするため多岐にわたっている。

② さらに現地では、オハイアット部族評議会内にある言語保持・再生委員会との協力関係を築くことができた。委員会とは既存する言語データの保存作業やその有効な活用方法に関して協議を重ね、幼児向けの言語保持プログラムの視察訪問を行った。また、23年度より現地コミュニティカレッジにおいて伝統言語の指導者養成講座が開講され

ることになり、今後も引き続き技術的・言語学的両面における協力体制が期待されている。

(2) 収録した音声・映像データはすべて光学メディアに焼き込んで保管を行なった。文字化されたデータには随時文法分析を加え、SIL Toolboxを利用して、語彙・テキストデータベースを構築している。今後さらにデータベースの拡充をすすめ、研究の次段階としての文法記述への基盤確立を行う。

(3) これまでの文法記述研究は概してコミュニケーションコンテキストと切り離された文法パターンのみ焦点があてられてきた。一方で、言語運用に基盤をおいた文法研究においても、幅広い自然談話資料が必要であるため大規模コーパス資料の豊富な蓄積がある西欧の大言語のみが対象とされてきた。本研究では、ヌートカ語という西欧諸言語とは典型的に非常に異なる言語のコーパスを整備し研究することで、言語運用に基盤をおいた文法研究を西欧諸言語の枠から外れた新しい方向に発展させる契機となると思われる。さらに、学術コミュニティに対してのみならず、消滅の危機に瀕している伝統言語の文法記述や言語再活性化活動を支えるデータベースを構築することによって、現地コミュニティをも含めた広い範囲での研究・活動に活用される知的資源の蓄積という大きな成果を上げることができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 中山俊秀、ヌートカ語の節連結：形式と用法、コーパスに基づく言語学教育研究報告（フィールド調査、言語コーパス、言語情報学 III）、査読無、7巻、2011、347-366
- ② 中山俊秀、動的体系としての文法に迫る—文法研究のこれからの形、日本語学、査読無、30巻、2011、34-44
- ③ 中山俊秀、ヌートカ語、事典・世界のことば141(大修館)、査読無、2009、568-571
- ④ 中山俊秀、新時代の記述言語学<上>—つながる言語記録にむけて、月刊言語、査読無、38巻、2009、68-75
- ⑤ 中山俊秀、新時代の記述言語学<下>—ありのままの言語学、月刊言語、査読無、38巻、2009、66-73

[学会発表] (計7件)

- ① Toshihide Nakayama、Language

Documentation in Japan and the Role of Linguistic Dynamics Research Project、17<sup>th</sup> Himalayan Languages Symposium、2011.9.7、Kobe City University of Foreign Studies

- ② 中山久美子、「言いさし文」における「けど」：談話様式と文法化の視点から、共同研究プロジェクト・北方諸言語の類型論的比較研究・節連結に関する通言語的研究・合同研究会、2011.7.10、東京外国語大学・本郷サテライト
- ③ 中山久美子、ワラバイ語における他動性・態の交替、共同研究プロジェクト・北方諸言語の類型論的比較研究・第3回研究会、2011.1.22、東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所
- ④ 中山俊秀、コンテクストを意識した記述研究、第4回琉球語ワークショップ、2010.3.14、琉球大学
- ⑤ 中山俊秀、つながる言語記録研究へ、第2回琉球継承言語研究に関するワークショップ、2010.3.6、東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所
- ⑥ Toshihide Nakayama、Fieldling: an Initiative toward the Brighter Future of Field Linguistics in Japan、3<sup>rd</sup> International Conference on Field Linguistics、2009.10.19、Institute of Linguistics, Russian Academic of Science, Moscow
- ⑦ Toshihide Nakayama、Grammaticization and Pragmatic Motivations in Clause Combining: a case study in Nuuchahnulth、11<sup>th</sup> International Pragmatics Convergence、2009.7.16

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中山 久美子 (Nakayama Kumiko)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員  
研究者番号：40401426

### (2) 研究分担者

中山 俊秀 (Nakayama Toshihide)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授  
研究者番号：70334448